The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	他者から/他者へ : メルロ=ポンティと他者
Author(s)	岸田, 智
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2004, 38, p. 49-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7659
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

他者から／他者へ

――メルロ＝ポンティと他者――

岸田　智

メルロ＝ポンティの思索の出発点は、つねに「知覚」であった。知覚こそ、私にあらゆる存在者の存在を与える根源的な働きであり、あらゆる知の源泉となるものであった。このことは彼の他者論においても同様である。他者も、私の知覚に現れるものでなければ、それは無であろう。だが同時に、ここに或る疑問が生じる。私の知覚に現れ、私の知となった他者とは、それは本当の他者なのだろうか。他者とは、私にとって知り得ぬものだからこそ、他者なのではないか。この点を指摘して、メルロ＝ポンティを批判したのはレヴィナスであった。

本小論は、こうした批判を踏まえつつ、メルロ＝ポンティの他者論を検討しなおすことを目的とする。そのとき私たちが注目するのは、彼の中期論考「他人の知覚と対話 La perception d'autrui et le dialogue」である。ここには、メルロ＝ポンティ他者論の要諦である知覚と言語の問題が、はっきりと語られていると思われるからである。

なお本論では、フランス語の“autrui”を「他人」、“l'autre”を「他なるもの」とそれぞれ訳し、その両方の意味を表すときにのみ「他者」という言葉を使うことにする。

一　他人の表象と身体

よく知られるように、レヴィナスはその他者論で、他者の出現における＜対面＞(face-à-face)、＜正面＞(de face)の関係を重視していた。他方、メルロ＝ポンティは中期論考「他人の知覚と対話」で、「他人 (autrui) はけっして正面 (de face) からは現れてこない」(PM 185、187) と繰り返し強調している。両者の主張の際立った対照は、二人の他者論の構えの相違をそのまま表していると考えたくなるが、詳細に見るならば、事柄はそう単純ではなさそうだ。というのも、メルロ＝ポンティにとって「正面」とは、私にとっての対象物の位置を意味していたからである。「われわれの面前 (devant) にあるのは対象だからである」(PM 187) と彼は書いている。しかしまた同じ論考で、彼は「他人 (autrui) の身体は私の面前にある」(PM 186) とも述べていた。つまり一見して、メルロ＝ポンティは、他人の身体は私の「面前」にあるが、他人はけっして私の「面前」、「正面」からは現れてこない、と主張していることになる。これはどういうことだろうか。

「われわれの面前 (devant) にあるのは対象だからである」(PM 187) で言われる「対象」とは、もちろん認識論的構成主観にとっての、あるいは、超越論的主観にとっての「対象」ではない。メルロ＝ポンティにとって「対象」はあくまで知覚的対象であり、私の身体的経験である知覚を離れては存しないはずだった。彼の「対象」とは、見ること、そのまなざしが、まなざす地平において形成する＜図－地＞構造においての、その＜図＞のことである。知覚的領野の中でまなざされた＜図＞＝「対象」が、私のまなざしにより顕在化し、まなざされなかったもの＝非対象物は＜地＞として＜図＞のまわりに潜在化する。このとき「対象」は、まなざしとの連関により顕在化／潜在

化する力動的な変化のうちにあって、〈図〉として現れる。そしてこのことは、私が「対象」から超越した主観の位置を取ることはできず、私もその〈図－地〉構造のなか、世界と諸事物のなかにあることを意味していた。「見るとは、己れを現す存在者たちの世界のなかに入ることであり、しかもそれら存在者たちは、お互いの背後に、あるいは私の背後に身を隠すことができるのでなければ、己れが身を現すこともできないであろう。換言すれば、ある対象を見るということは、その対象のなかに住まいに来ることであり、そこから他の一切の事物を、それらがその対象の方に向けている面（face）にしたがって捉えることである」（PP 82）。

「世界のなかに入る」私は身体的存在として、身体を持つという仕方で、世界に住まい諸物のなかに入り込む。同時に私がまなざすことができるのも、身体を持つことによる。「私の身体とは一般に対象が存在するようにさせている当のもの」（PM 108）である。

世界のなかで、私が単なる諸事物と異なるのは、私の身体が知覚するということによる。世界に住み込み、諸物に取り巻かれた私が、身体を基点にまなざしを向けるとき、そのまなざしに対面して「対象」は現れる。したがってそれは私の「正面」の位置にあることになる。

諸事物と同様、私が他人の存在を知る場合も、その他人の知覚から始まるだろう。他人を見るとき、他人はまず「対象」として捉えられることになる。「他人の身体は私の面前にある」（PM 186）とメルロ＝ポンティが書くとき、それはまず他人の身体を見るという場面に定位されている。見る私にとって、見える他人の身体は見えるものとして、諸事物と同等、私の知覚的領野の中の一存在者として現れ、他人の身体は私の知覚「対象」である。その身体は私の「面前」にある。

だが他人が諸事物と異なるのは、私がそうであるように、他人も身体を持ち、その身体によって私の領野、私の世界に住み込んでいる知覚する存在であるという点にある。「私の身体とは一般に対象が存在するようにさせている当のもの」(PM 108)であるならば、他人の身体も「対象が存在するようにさせている当のもの」であるはずだろう。私にとってはじめは「対象」であった他人の身体が、私とは別のまなざしを持ち、その他人自身のまなざしに対する「対象」を持ちうる。私がそうしたように、他人のまなざしは、私の身体を他人の面前において対象化、〈図〉化する。見えるものであったはずの他人が、私を見返し、見るものとして私を見るということが起こる。「私の身体は、それが見たり触れたりするものであるかぎりでは、触れられも見られもしない」(PP 108)「二つの手は、たがいに他に対して、同時に触れられたものでもあれば触れるものでもあるということは断じてない」(PP 109)。

私が見るものであるかぎり、他人は「対象」、〈図〉として現れる。だが「対象」化、〈図〉化した他人とは、それはすでに他人ではない。あるいは、すでに死んだ他人であろう。同様に、他人が私を見るとき、私は見られるもの、「対象」の位置に置かれる。それはすでに私ではない。私も他人も、同時に見るものであり、かつ、見られるものであることはできないのだ。してみると、私と他人とは、同じ私の（そして他人の）世界に住み込んでいるにもかかわらず、私／他人という対称関係において同時に同じ場所に現れることは決してできない、つねに非対称の関係にあることになる。私が見るものであるとき、他人は見るものでなく見られるもの、死んだ他人であり、他人が見るものであるとき、私はそれを見ることはできない。そして、この関係を成り立たしめる交差軸であるものこそ、私と他人が知覚的主体として身体を持つということなのだ。

他人は身体を持つがゆえに、見えるものとして、私の知覚的対象となる。だが同時にまた、他人はその身体を持

つがゆえに、見るものとして、生きた他人となり、私のまなざしの対象化からつねに逃れ去る。他人にとっての私についても、同じことが起こっている。すなわち「他人の身体は私の面前にある」(PM 186) のだが、「他人はけっして正面 (de face) からは現れてこない」(PM 185、187) のだ。私も他人も、身体を持つがゆえに、このような両義的な在り方を生きることになる。「他人は物のうちにいるのではない。彼はその身体のうちにいるわけではないし、また私でもない。私は彼をどこにも定位することはできないし、事実われわれは彼を即自のうちにも、私という対自のうちにも、どこにも定位しないのである」(PM 189-190)。

ここで、改めて或る疑問が浮上する。どこにも定位されない他人とは、ではどのように私に現れるのだろうか。私がまなざす他人を見ることができないなら、私に見えるのは、他人ではなく、「対象」としか言えないはずである。それがなぜ他人であると、私は知ることができるのか。だが、もちろんこうした問いは、メルロ＝ポンティの思考の圏内にある。「問題なのは、いかにして空間中の一対象が一実存の物言う痕跡たりうるのか、(中略) ということである」(PP 401)。

二　他人の言葉 (parole)

見る場面において「痕跡」と言われた他人の私への現れについて、論考「他人の知覚と対話」でメルロ＝ポンティが取り上げる特徴的な場面が「物言う」場面、つまり、私と他人との対話の場面である。見るの次元では、私の「正面からは現れてこない」し、「どこにも定位することのできない」はずだった他人が、対話においては「そこに何者かがいるということを信じざるをえなくなる」(PM 185) し、「私の目から見ると、つねに私が見たり聞いたり

しているものの余白に存する」(PM 186) ようになると言われる。では、他人はどのように現れ、対話はどのように成立するのか。

メルロ＝ポンティが最初に着目するのが、私と他人がともに使用する共通言語、「同じラング (langue)」(PM 194) である。「ラング langue」は、メルロ＝ポンティ中期になされたソシュール言語学との接触、受容によって彼が使用するようになった用語で、ソシュールでは、＜ラング langue＞は個別の言語共同体で用いられる制度的な言語体系、つまり、日本語とかフランス語といった＜国語＞のことを意味していた。だが＜国語＞といってもそれは、物のような実体性を持つものでなく、ちょうど或るゲーム、例えばチェスが、ゲームとして何らか概念的に表象することは可能であっても、実際にはまさに個別にチェスをプレイすることでしかゲーム自体は実現されないように、＜ラング＞もその都度の具体的発話によってのみ実現されるものである。そして＜ラング＞を実現するこの具体的発話のことを、ソシュールは＜パロール parole＞と呼んでいた。メルロ＝ポンティはこの事情を踏まえつつ、対話について次のように言う。「(前略) 対話の経験においては、他人のパロールがわれわれのうちでわれわれの意味に触れにくるし、われわれのパロールも、返事がそれを証明してくれるように、他人のうちで彼の意味に触れにゆくのだということ、われわれは、いずれもが同じ文化的世界に属し、なによりもまず同じラングに所属している限り、たがいに侵食しあうものだということ (以下略)」(PM 194)。

ここで使われている「われわれ」(nous/nos) という語に注目したい。なぜ「われわれ」であって、私ではないのか。あるいは、この対話では、なぜ＜他人－私＞という関係でなく、＜他人－われわれ＞という対応関係なのか。

メルロ＝ポンティがここで考えているのは、同じ「ラング」に属した者同士＝「われわれ」が、「われわれ」とし

て「パロール」をやり取りするような段階での対話である。そこでの「パロール」は、正確に「ラング」の記帳に書き込まれている意味をそのまま伝達するものであり、他人の「パロール」も私の「パロール」も、「われわれ」の「ラング」の具体的実践としての発話以外のものではない。そうであるから、「他人のパロールがわれわれの意味に触れる」し、「われわれのパロールも（中略）他人のうちで彼の意味に触れにいく」ということが起こるのだ。私たちが普通、対話として考えるのは、このような対話であろう。

だが、こうした「ラングの単純な使用」（PM 195）あるいは、「パロールのこの『一般的』用法」（PM 194）でしかないような対話は、私に他人という「概念」（PM 195）しか与えない、とメルロ＝ポンティは言う。「ラングの単純な使用は、（中略）制度化された諸行動と同様に、私の領野一帯に拡散している他人一般、人間的ないし文化的空間、いわば種としての個人、要するに一つの現前というよりもむしろ一つの概念をしか私に与えてくれない」（PM 195）。文化的制度である「ラング」とその使用である「パロール」とが単純に直結し、私と他人の発話が「われわれ」というすでに制度化されている「一般的」次元での「ラング」の意味の交換でしかないとき、そこにある発話は制度的な「われわれ」の発話であって、そこに他人が現前しているわけではない。であるならば、ここでの「他人」とは抽象化された「他人」であり、結局「ラング」内の意味に包摂されてしまう、というわけである。私の「パロール」も他人の「パロール」も、「われわれ」の「ラング」に包摂され、他人といってもそれはすぐに「われわれ」が語る「他人」という意味に変換される。

そこでメルロ＝ポンティが他人との対話において「ラング」以上に重視するのが、「パロール」の役割ということになる。「パロール」が「ラング」の具体的使用であるという「ラング」を前提とする「パロール」観を裏返し、「ラ

ング」を文化的制度として成立させるものこそ、話者たちの具体的「パロール」であるとして、「ラング」の前提としての「パロール」を見出していく。いわゆる「制度化」の概念として知られる彼に特徴的な思考スタイルである。

「ラング」の前提となり「ラング」を乗り越える「パロール」を、彼は「征服的なパロール」(PM 196) と呼ぶ。「われわれの興味を惹くのは、この征服的なパロールであり、このパロールこそが、制度化されたパロール、つまりラングを可能にする」(PM 196)。それが「征服的」と呼ばれるのは、第一に、「ラング」—「パロール」の制度化された言語体系を乗り越える力を「征服的なパロール」が有するからであり、第二に、制度化された「ラング」—「パロール」の主体であった「われわれ」の次元を、その話者である私と他人が乗り越えるからである。「征服的なパロール」のこの多重の乗り越えによって、「ラング」は「パロール」から新たな意味を獲得し、話者である私は「われわれ」という一般化された次元から「私と私のパロールとの原初的関係」(PM 194) を獲得する。

だが目下の私たちにとってさらに重要なのは、「征服的」といわれる所以の第三の側面と目される点である。それは、すなわち、私の「パロール」と、(この時点では客体的で「対象」＝＜図＞としての) 他人の「パロール」という境界の乗り越えと、私と他人との関係の不断の更新をもたらす「征服的なパロール」の力である。

対話における他人と私の「パロール」の交換と展開は、「パロール」に内在する「征服的な」力によって、制度化された＜ラング＞の意味を廃棄し乗り越え、「他人が所有しているわけでもなければ、私が所有しているわけでもないある意味へ向けて、私の方を投ずる」(PM 197) ようになる。私が他人に語りかけ、他人が私に語りかけるのを聞くとき、私の「パロール」は私がそこに入れ込んだ意味以上のものを、他人の「パロール」のなかに聞きとるようになる。そのとき私は、他人の「パロール」に「不意を襲われ、方向を狂わされ」(PM 198)、私の「パロール」の

外に投げ出される。私は「あらゆる意味を越え出るような、さしあたっては暴力的な運動」に巻き込まれていることを知る。この運動は私の「パロール」単独では起こりえないものであり、私と他人とは、この運動の「共犯関係」(PM 200) のなかにある。この「暴力的な運動」の渦中で、私は私の「パロール」と私という境界を乗り越える。そこでは、私が語るという能動性と私が聞くという受動性の二項関係も、もはや問題ではない。「私が他人に語りかけ、他人が語りかけるのを聞くとき、私が聞きとることは、私の言っていることの合間に入り込んでくるし、私のパロールは他人のパロールによって側面から切り直され、私は他人のうちでおのれが語るのを聞き、他人が私のうちで語るようになる」(PM 197)。

この段階、つまり「征服的なパロール」による「暴力的な運動」である対話の渦中にあって、その「共犯関係」を生じさせるもう一つの私、すなわち、私を不意打ちし私の「合間に入り込んで」「私のうちで語る」他人と、私は真に出会うのである。「征服的パロール」を語る他人は、「対象」＝＜図＞としての他人ではもはやない。それは、私とは異なる「パロール」を語り、私に触れにくる生きた他人である。またその他人は、単なる＜パロール＞＝言葉、「概念」でもない。他人は、私との対話において実際に語る。その「パロール」は「征服的」で具体的な語りであり、その語りは「所作としてのおのれを廃棄し、ある意味に向かっておのれを乗り越える所作」(PM 196) である。つまり、他人は「パロール」を語り、それは所作として、身体において語られる。

ここで「征服的なパロール」と呼ばれたものをもう一度よく見てみよう。それはソシュール的な＜ラング＞－＜パロール＞の関係における＜パロール＞、つまり＜ラング＞内の意味の具体的使用としての＜パロール＞ではあり得なかった。それは＜ラング＞として制度化された意味を乗り越えるものだったからである。だが他方、「征服的

なパロール」が〈ラング〉とはまったく別に、〈ラング〉つまり言語の外部で思惟され、語られるということも、またあり得ないはずである。私たちにとっての意味とは言語的な意味でしかありえず、言語に先立つ何らかの思惟や意味を否定したのが、メルロ＝ポンティ言語論の一貫した姿勢だったからである。「発言者は語る前に思惟するものではないし、それどころか、語っているあいだにも思惟しはしない。すなわち彼の言葉（パロール）が彼の思惟なのだ」(PP 209)。「沈黙についてのその記述そのものが全面的に言語の力にもとづいているというのに、おのれが沈黙せる意識に合致していると信じている沈黙のコギトの素朴さ」(VI 230)。

とすると「征服的なパロール」とは、「パロール」つまり言葉でありながら、「ラング」の内部に場所を指定できず、意味として現前し得ないようなもの、だが、それによって意味が産出されるような何か、ということになる。「パロール」でありつつ、意味の外部を示すもの、意味の前提であり、かつ、私の意識にとって現前し得ぬ〈他なるもの〉。私は「征服的なパロール」において、他人とともに、私にとって決定的に〈他なるもの〉とも出会っていたということになろう。

三　レヴィナスの批判

メルロ＝ポンティのこのような他者論を批判するのはレヴィナスである。彼の批判のポイントは、以下のようなものであった。

「受肉せる言語（langage）が受けとる意味といえども、（中略）『志向的対象』であることに変わりはない。発

語し文字を書く身体によって媒介されたあとで、構成的意識の構造がそのすべての権利を再び見いだすのである。意味が表象に対して有する剰余は新たな現前の仕方、それも構成的志向性に比して新たな現前の仕方のうちに存しているのではなかろうか。そして、この仕方の秘密は『身体的志向性』の分析では汲み尽せないのではなかろうか。（中略）記号による媒介が意味を構成するのではなく、逆に意味（その根源的出来事が対面〔le face à face〕である）が記号の機能を可能にするのである」（TI 226）。

この文言は直接、論考「他人の知覚と対話」に向けられたものではないが、メルロ＝ポンティの言語論、他者論全体に関わるものであることに違いはない。レヴィナスに従えば、メルロ＝ポンティの言う「征服的なパロール」にしても、それが「記号による媒介が意味を構成する」という段階にとどまる限り、「征服的なパロール」が生み出す意味とは、結局「志向的対象」であることに変わりないことになる。記号の連鎖、展開から生み出される意味は、記号を前提とする。そしてその記号は、たとえこれを「身体的志向性」と呼ぶにしても、記号を「発語し文字に書く」私によって意味され、表象されることを前提とする。かくして「征服的なパロール」と言えども、最後にはそれは私の「構成的意識」に回収され、他人は、私のまなざしに現れる〈図〉としての「対象」であるか、「他人」という言葉の意味、概念でしかなくなる。他人の対象的知覚、他人の概念的認識、それはつまるところ、私の他人についての知ということになろう。別の箇所でレヴィナスは次のように書いている。「メルロ＝ポンティにとって認識は、すでにというか、依然としてというか、知識にとどまっている」（HS 138）、「知識は、知られたものと一体化しつつ、自分にとって異質でありえたものともただちに一致してしまう」（HS 139）。こうして、すべては振り出しに

戻る、というわけであろう。

レヴィナスが、意味の「新たな現前の仕方」、「根源的出来事」と考えているのは、他者との「対面」の場面である。メルロ＝ポンティが言語を私の身体的表現と考えたのと対照的に、レヴィナスは言語を私の他者への贈与と考える。レヴィナスにおいては、言葉の意味が現前するのは他者においてであり、私が他者への関係として言葉を贈与する「対面」の場面においてである。つまり、私にとって言葉の意味とは、いつも「他なるもの」であり、あるいは、他者の言葉を聞くことによっていつも遅れて私に表象されるような何ものか、である。意味は「表象に対して有する剰余」であり、記号が「意味を構成する」のではなく、反対に「意味が記号の機能を可能にする」。そこから「意味、それは無限である。言い換えるなら、意味とは『他者』(Autrui) である」(TI 227) と言われる。

ここで言われた「意味」とは、＜意味されたもの＞ということではもちろんない。それは記号（意味されたもの）を可能にする「意味」である。その「意味」が「無限」であり「他者」であるのは、「意味」が記号によっては意味されないからであり、つまり、それが言語によっては現前せず、逆に言語を可能にするものであるからだ。記号に媒介され、記号の連鎖、展開の中で生まれる意味は、記号と記号の間に側面的に現れる。他方、何ものにも媒介されない「意味」は、それ自体、対面において最初の言葉として顕現する。その最初の言葉を発するのが、対面に顕現する対話者としての「他者」であり、彼の発する言葉こそ、応答せよという呼びかけであった。私はその呼びかけに無限に答え続ける。その連鎖において、「他者」である最初の「意味」が、記号である＜意味されたもの＞を可能にする。

レヴィナスのこうした批判を踏まえてメルロ＝ポンティに立ち戻るとき、問題の焦点は、言語を開始し意味をも

たらすのは他者であるのか、または、言語は他者を前提するのか（レヴィナス）、それとも逆に、言語の連鎖の中で新たな意味と他者が到来するのか、または、他者は言語を前提するのか（メルロ＝ポンティ）ということになるだろう。言語は他者を前提する（レヴィナス）と主張しようとすれば、メルロ＝ポンティによって「沈黙についてのその記述そのものが全面的に言語の力にもとづいているというのに、おのれが沈黙せる意識に合致していると信じている沈黙のコギトの素朴さ」（VI 230）として提出されていた疑問と同種の問題、つまり、言語として現前しない言語の外部というものを私たちは思考しうるのかという疑問に突き当たることになろうし、他者は言語を前提する（メルロ＝ポンティ）という立場に立とうとすれば、その他者とは、「『志向的対象』であることに変わりはない」（TI 226）、「依然として、知識にとどまっている」（HS 165）というレヴィナスの批判を受けることになるだろう。

四　他人から他者へ

ここでもう一度、本論の冒頭に戻ろう。メルロ＝ポンティは「他人はけっして正面からは現れてこない」（PM 185, 187）と書いていた。その他人が他人として「現れる」のは対話の展開において、「征服的なパロール」の「征服的」な力によって、私と他人が「われわれ」＝「ラング」の意味を脱するときである。このとき私と他人は、ラングにとっての〈他なるもの〉、「征服的なパロール」つまり言葉でありながら、ラング内に場所を指定できず、意味として現前し得ないようなもの、だが、それによって意味が産出されるような〈他なるもの〉と出会っていた。メルロ＝ポンティにおいて私たちが見極めたこの〈他なるもの〉とは、言語の連鎖の中で言語の〈他なるもの〉として、後続の言語的意味の前提となって意味を産出するような非言語的意味である。

レヴィナスは「記号の媒介によって」構成された意味は、記号を前提とする「『志向的対象』であることに変わりない」という。確かにこの〈他なるもの〉は、記号の連鎖の中で生じたものである点では、記号を前提とする。しかし、それはまたラングを越え出てラングにとっての〈他なるもの〉となり、むしろラングの新たな意味を産出するようもたらすという意味では、記号の〈他なるもの〉として記号の前提となるものでもある。

このように見てくると、私たちはメルロ＝ポンティの他者論について、次のように評価することができるのではなかろうか。すなわち、メルロ＝ポンティにとって〈他者〉は対話を通して顕現する。だがその〈他者〉は一挙に顕現するのではなく、まずは身体を持つ生きた話者として、「他人」として現れ、私と他人との対話の運動、征服的なパロールの展開を促す。やがて征服的なパロールの運動は、言語的意味としてのラングを乗り越え、ラングの意味として現前しない〈他なるもの〉に触れる。このときそれまでの道行は逆転し、この〈他なるもの〉がラングの前提となり、私に〈他者〉の顕現を示す。〈他なるもの〉は「他人」を通じて顕現するが、私にとっての「他人」は、〈他なるもの〉の顕現によって、真の〈他者〉となる。〈他なるもの〉は「他人」を通じて顕現し、「他人」は〈他なるもの〉からその真の意味を受けとる。メルロ＝ポンティにおいては、「他人」から〈他なるもの〉へという運動と、〈他なるもの〉から「他人」へという運動が、つねに交互に転換して相互が相互に意味を与え合っているのである。そしてその運動の渦中において、〈他者〉が顕現するのである。

注

※　本論で引用する著作に関しては次の略号を使用し、頁数を併記する。引用した日本語は翻訳書に従うが、文脈に応じて訳を変えた箇所もある。

Merleau-Ponty, M. –, Phénoménologie de la perception, Gallimard, 1945. (PP) 竹内芳郎／小木貞孝訳『知覚の現象学Ⅰ、Ⅱ』みすず書房、一九六七
———, La prose du monde, Gallimard, 1969. (PM) 滝浦静雄／木田元訳『世界の散文』みすず書房、一九七九
———, Le visible et l'invisible, Gallimard, 1964. (VI) 滝浦静雄／木田元訳『見えるものと見えないもの』みすず書房、一九八九
Lévinas,E., –, Totalité et infini. Essai sur l'exteriorité, La Haye, Martinus Nijhoff, 1961. (TI) 合田正人訳『全体性と無限』国文社、一九八九
———, Hors sujet, Editions Fata Morgana, 1987. (HS) 合田正人訳『外の主体』国文社、一九九七

（大学院後期課程学生）

SUMMARY

De l'autre / à l'autre, Merleau-Ponty et l'autre

Satoshi Kishida

«La perception» était toujours le point de départ de la philosophie merleau-pontienne. Elle est la fonction primodiale qui permet de donner à moi l'être de l'étant, et ainsi, est devenue la base de tout savoir. Il en est de même pour «autrui» chez Merleau-Ponty. Si «autrui» est l'autre pour moi, il n'apparaît pas pour moi, et n'existe pas. D'où une question: Est-ce vraiment «autrui», qui apparaît dans ma perception, et est devenue le savoir? Celui qu'on ne peut pas connaître, on l'appelle «autrui». C'est Lévinas qui critique Merleau-Ponty en précisant cette contradiction. Notre essai a donc pour objet de réexaminer le concept de «autrui» chez Merleau-Ponty tout en suivant l'analyse de Lévinas.

キーワード：他者，言語，メルロ＝ポンティ，レヴィナス